幼児期から大切にしたい
学びに向かう集団づくり

１年生３月の休み時間のことです。教室で数人の子どもたちがこんなことを話していました。

「ホ～ホケキョ、ケキョ」というウグイスのさえずりを耳にしたＡちゃんの「うわぁ、きれい。もう春だねぇ」の一言から、「でも、まだ手袋してるよ」「豆まきをしたから春じゃない？」「チューリップの芽、出てないし」と、五感を駆使し、これまでの経験や知識をフル回転させた「もう春」VS「まだ冬」の論議が始まりました。その輪は、５人、１０人と増え、自分の考えを貫く子、仲介役にまわる子、じっくり聞いている子など、様々です。でも、なかなか結論は出ません。

そこに校庭から戻ってきたＢくんが自信満々の表情で「もう春じゃん！」と一言。「なんで？なんで？」の周囲の問いかけに、Ｂくんは、こう言いました。「だって、ぼくたちもうすぐ２年生だよ」

学級の全員が、顔を見合わせて「そうだよねぇ」「うん春だ」と満場一致で「もう春」に決まりました。

休み時間を少しオーバーしていましたが、全員、やる気満々の得意気な顔で３時間目の授業が始まりました。

「仲間と共に」～※協同する経験～（５歳児）

この玉を上から転がしたいんだよなあ。

どうすればいいんだろう？

ぼくがここを持ってるよ。

よ～し！上に上げてみて。

うまくいきそうだ！

※「協同する経験」
友達と遊ぶ中で、一人では思いつかなかった発想の遊びが生まれたり、友達のものと自分のものが一緒になることで新たなものがつくり出される経験。（「幼児期から児童期への教育」国立教育政策研究所教育課程研究センター）

このような「学びに向かう集団」となるためには、幼稚園や保育所で、遊びや生活を通して、※協同する経験を重ね、その学びの成果を小学校が引き継ぎ、さらに磨かれた集団へと高めていく必要があります。幼児期から児童期にかけて、それぞれの時期に大切にしたい子どもの姿と、それを支え、引き出す教師の関わりについてまとめました。

栃木県総合教育センター幼児教育部
栃 木 県 幼 児 教 育 セ ン タ ー

今、なぜ「集団の教育」が必要なのでしょうか？

宇都宮大学教育学部教授　青柳　宏

なぜ、「集団の教育」が必要なのかと言えば、それは「集団の教育」が、人間にとってとても大切な「社会性」を育んでいくからだと言えるでしょう。

教育は、一人一人の「個性」を育めばよいのだ、ということになると「集団の教育」の意味をあまり感じられない人もいるかもしれません。確かに、「個性」は集団というより小さな関わりの中で育まれる、と考える人も少なくないかもしれません。母親、父親、兄弟、親友との関わりとか、あるいは一冊の本との出会いとか、あるいはまた自然とのかかわり等の比較的狭い範囲の関わりの中で「個性」が育まれる、というイメージです。そして、さらに「個性」を育みたいと考えると、「集団の教育」よりも、もっとよい環境があるのではないかと考える人がいてもおかしくありません。

ところで、私自身、正直に言えば、「幼稚園」「学校」で行われる「集団の教育」はとても苦手でした。「学校」よりも、家で絵を描くことの方が私は好きだったのです。しかし、それなら「学校」ではない別の環境でもっと自分の「個性」を伸ばした方がよかったのではないか、というと、そうは考えません。やはり、私は「学校」に行ってよかったと思っています。なぜなら、大げさな言い方で恐縮ですが、「人間は、自分のためだけでなく、他者のために生きることに喜びを見いだす動物だから」です。言い換えれば、どんなに自分の「個性」を伸ばしても、その「個性」を「社会（集団）」の中で生かさなければ満足して死ねないのが人間である、ということです。

自分の「個性」を、「社会（集団）」の中で生かしていくためには、「他人」を知らなければなりません。私が、「集団の教育」を受けてよかったと思うのは「他人」を知ることが出来たからです。「集団の教育」がもつ意味は、そこで自分とは異なる持ち味をもった「他人」と出会うことです。好き嫌いを越えて、多くの「他人」に出会うことです。そして、そのような「他人」を受けとめながら、どう自分の「個性」を主張していくか、そのイメージを育んでいくことに「集団の教育」の大きな意味があります。また、そのイメージを育んでいく、ということが「社会性」を育むということなのです。

「集団の教育」という言葉は誤解されやすいと思います。要は、「集団」の中の、好き嫌いを越えた一人一人に出会うということです。「学校」という「集団」を経験したことによって、私の心の中には、そこで出会った無数の一人一人の「顔」が今でも生きていると言えます。「社会性」を育んでいくということは、（今はもう会うことがなくても）無数の一人一人の「顔」に語りかけ続けるということではないでしょうか。

ところでまた、「集団の教育」という言葉は誤解されやすいため、しばしば、「集団」という「かたまり」に個人を合わせさせる、というように解釈されてきた嫌いがあります。しかし、このような教育をしてしまうと、逆に個人は一人一人の「他人」に出会うことが出来なくなってしまいます。

今、例えば、子どもや若者（大人も）の中には、一日に無数のメールのやり取りをしないと落ち着かないという人がいます。その「原因」は、例えば「学校」という集団の場の中で、「他人」にじっくり出会う、ということが出来ていないからだと思います。浅く表面的な関わりしかないから、その満たされなさをメールでつぶやかざるを得なくなる。言い換えると、今の世の中は、「自分」と「他人」の間の「間（ま）」がなくなっています。他人にじっくり関わった上で、自分の心の中に戻ってじっくり考える、そういう「間」がなくなってきていると思います。

だから、今こそ、幼稚園、学校という「集団の教育」の場が、一人一人が一人一人の他人にじっくり出会っていく、ということを保障しなければなりません。このリーフレットに載せられている事例はどれも、本当に素晴らしい「出会い」の事例です。私たちは、この事例を熟読することで、子どもたち同士をいかに出会わせるか、そのイメージを豊かにもつことが出来ると思います。

「一人一人が一人一人に出会っていく教育」を！！それがこれからの「集団の教育」に私が期待していることです。

3歳児　様々な環境や人と出会う時期

4歳児　自分と他者の存在に気付く時期

大切にしたいこと

・規則正しい生活習慣
・大人との信頼関係
・身近な環境への探索
・情緒の安定

他の子のしていることを感じる

園庭でダンゴムシをつかまえ、誇らしげに見せてまわるA児。「いいなあ～」というB児の一言に、「あっちにいるんだよ」と、A児は勢いよく走り出した。ダンゴムシを見ていた幼児が、みんなで後を追いかけていく。

同じ場で同じように遊ぶ

A児が夢中で泥だんごを作っている。少しずつ、近くに幼児が集まってきて、泥だんご作りが始まった。ベタベタの土の上にサラサラの砂をかけることを繰り返していく。それぞれが感触を楽しみながら、時々顔を見合わせて微笑んでいる。

友達とつながる楽しさを味わう

A児は、砂場で、ひたすら穴を掘っている。一方、B児は、ひたすら水を流し続けている。C児はそんな様子を見ている。そんな3人がいつの間にか「大きな山を作ろう！」と、交代で水を汲んできたり、一緒に砂を盛ったり固めたりして、楽しんでいる。

自己主張と自己抑制の間で葛藤する

A児とB児で、転がったボールの取り合いが始まった。しばらく、どちらも譲れずにいたが、C児が「じゃんけんで決めれば？」と言うと、他の幼児もそれに同調した。2人は、仕方なくじゃんけんをし、負けたB児はボールを譲ったが、何となくすっきりしない雰囲気のまま、再び遊び出した。

それぞれの遊びが広がっていく

A児たちは、5人で誕生会ごっこを始めた。そこへ、B児が来て、突然、5人と一緒に歌い始めた。その様子を見ていた他の子も手をたたき、一緒に歌い始める。徐々に人数が増え、それぞれが出し物を始めた。他にも、お客さんになる人、プレゼントを届ける人等、それぞれの役を楽しみながら、誕生会ごっこは大いに盛り上がった。

指導のポイント！

・ありのままの幼児の姿を受け止める。
・幼児が自然と集まる場をつくる。
・幼児の思いや言葉をつないだり広げたりする。
・先生や友達と共に過ごす喜びを伝える。
・気の合う仲間同士の遊びを大切にし、見守る。

5歳児

友達と協力し合い
探究する時期

入学

小学校1年生

新しい環境や人と
出会う時期

4月

やり遂げた満足感を味わう

夏祭りのクラスのおみこしを作るために、幼児は、思い思いにおみこしの絵を描く。それぞれのアイディアを大切にしながら、みんなで何度も話し合い、何とか一つのイメージにまとめ、おみこしを完成させた。当日、大きなかけ声をあげながら、一人一人が自信に満ちた顔でおみこしを担いでいた。

共通の目的になっていく

裏山で遊んでいると、数名の幼児が、「秘密基地作ろう！」と木の枝を集め出す。「ここは玄関」「トイレもなくっちゃね」「『みんなのうち』っていう看板作ろう」と話が盛り上がり、どんなものを集めるか、何が必要か、どんどんアイディアが出て、遊びが盛り上がってくる。

所属感を感じる

入学してすぐ「どうぞよろしくの会」を行い、自分で作った名刺を友達と交換し合った。幼稚園や保育所に通っていなかったA児は、交換できず、寂しそうにしていた。そんなとき「Aちゃんの名刺かわいい！」のB児の一言でみんなが集まってきた。

一緒に暮らす相手を思いやる

A児が、トイレの中から「先生、紙がない」と叫んでいる。急いで届けたが、A児は、すでにトイレから出ていた。そして、「自分の分の紙はあったんだけど、次の人が困るからね」と笑顔で答えた。

生活のルールをつくっていく

梅雨の時期、教室での過ごし方のルールを話し合った。「けんかをしない」という意見が出たが，A児が「どうして雨の日は、けんかしちゃうのかな？」と言い出した。「雨の日は、寂しいから、くっつき過ぎちゃうんだよ」「くっつくのはいいよね」「体を伸ばしたくなっちゃうんだ」「よく床に寝てるよね」「転んで危ないよ」等、つぶやいている。その結果、ルールの中に「床に寝転がらない」が入った。

仲間の一員であることを意識する

毎日、リレーごっこを楽しんでいるが白組はいつも最下位になってしまう。白組には、走ることが苦手なA児がいるからだ。最初はA児を責めるような幼児もいたが、保育者がA児のみんなと走りたい思いを伝えると、それぞれがどうしたらいいか考えるようになった。みんなで、A児と練習をし、A児もそれに応えた。なかなか他のチームに勝つことはできないが、白組の幼児たちは「頑張ってるから、6位でも1位と同じだよ」と満足そうである。

小学校を意識してはりきる

就学時健康診断の日、保育者が「小学校の先生のお話をよく聞こうね」「分からないことがあったら、お世話係の6年生に聞いてね」と声をかけると、「先生、大丈夫。何かあったら、ぼくたちみんなで助け合うから。だってぼくたちもうすぐ1年生だよ」という答えが返ってきた。

友達のよさに出会う

A児はいつも友達の嫌がることをしてしまう。ある日、学級の児童の怒りが爆発し、教師に訴えに来る。担任が、A児に話を聞いていると、「Aくん優しいところもあるよ」とB児がぽつりとつぶやいた。「保育園のとき、優しくしてもらった」同じ園だったC児もつぶやく。A児のことで怒っていた児童も、「そういえば、この前、転んだとき優しくしてもらった」など、口々にA児の優しさを語り出した。

- 幼児同士で話し合っている場面を見逃さない。
- 一人一人のよさや幼児期の様子を知る。
- 仲間同士で試行錯誤できるように環境や教材を工夫する。
- 友達とつながるきっかけをつくる。
- 園やクラスの中で、自分の力を発揮できるような場面をつくる。

自己や他者を理解し
仲間意識を形成する時期

自分らしさを発揮しながら
課題を追究していく時期

3月

一人のつぶやきから学びが広がる

A児は、まだ黄緑色の朝顔の実が気になり、「中は、どうなっているのかな」とつぶやいた。他の児童も「見たい！見たい！」と言う。みんなで、黄緑の実を採り、皮をむいてみる。「種が白い」「レタスみたいに緑の葉が重なってる！」「種の中に緑の芽みたいなものがある」と各々につぶやく。B児は「白い種からも芽が出るか試してみたい！」と言い、1つのポットには黒い種、もう1つには白い種をまいた。教室に並ぶ2つのポットを、子どもたちは毎日のぞき込んでいる。

話し合って解決する

体育の時間、鬼ごっこの場面で、A児が「挟み撃ちなんてずるいよ」と鬼になるのが嫌で怒っている。「一人ねらいをしてるわけじゃないよ。捕まえられないんだもん」と友達が言う。しばらく話し合っていたが「捕まらないとつまらないから，挟み撃ちはいいことにしよう」と自分たちでルールを決めた。教師が、A児に「いいの？」と尋ねると，「いいよ。逃げるから」と言って鬼ごっこを再開した。

役に立つ喜びを感じる

係活動の振返りの日、それぞれの係への意見を自由に発表した。「配り係さんは、忙しいのにがんばっていました」「窓係さんのおかげで気持ちよく生活できます」などの意見が出て、みんなうれしそうである。その日から、休み時間などにも、楽しそうに係の仕事をする姿が見られるようになった。

思いがつながって一つになる

「13－8」の文章問題を解いていると、「ケーキなのに本当に残るの？」「ケーキが残るわけないよね」「私だったら100個はいける」などと、話が広がった。ケーキが残ることにこだわった児童たちは「先生、問題の最後に『5人のみんなで仲良く食べたとさ』をつけていいですか」と提案してきた。「それは幸せな終わり方だね」というと、満足そうに次の問題に取り組んだ。

これまでの学びを生かしてはりきる

学級ごとに合唱を見せ合った。A児は隣の学級の方が声が出ていることに気付き、「だって人数が違うんだもん」と言う。それを聞いたB児は「僕が2人分出すよ」と言い、C児は「じゃあ，私は3人分がんばる！」と声を上げた。さらに、「姿勢をよくすれば？」「声を遠くに出すんだよね」「口を大きく開けるんだよ」など、これまでの学びを生かした話合いが始まった。

大切にしたいこと

- 互いに尊重し合う関係
- 物事に主体的に関わる態度
- 地域社会への関心
- 集団における役割意識

- 児童の言葉やつぶやきを学級に広げ、学びにつなげていく。
- 児童同士の話合いで、一人一人の思いをつないだり、見守ったりする。
- 仲間意識がもてるような体験活動を計画する。
- 児童が自分たちで判断して行動する場面をつくる。

あなたならどのような関わりをしますか？

小学校１年　音楽「いろいろな音に親しもう」
ねらい：星空の様子に合う音を見つけて演奏する。

「星が１つ」「星が３つ」「無数の星」が描かれている３枚の景色の絵を提示し、楽器を使って情景に合った音を見つける授業を行った。多くの児童は、トライアングルを選び、星１つは１回、３つは３回、無数の星は連打して鳴らしている。しばらく見守っていると、楽器の種類を変えたり、人数を変えたりして、それぞれが友達とやりとりをしながら工夫し出した。教師も一緒に楽器を鳴らして楽しんでいたが、一緒に鳴らす人数も増えてきて、演奏が騒がしくなってきた。よく見ると、A児がつまらない表情をしている。一度、演奏を止めて理由を聞いてみると「これは星の音じゃない」と言う。教師が、「A児が言っている星の音ってどんな音だと思う？」と他の児童に聞いてみると「静かな音」「キーンっていう感じ」などと言う。B児が「澄んでる音だよね」と言うと、みんな何となくそれに同意をした。その後、「澄んだ音がする楽器はどれかな？」とか「たくさん鳴らさなくても、鉄琴をこうやって端からなぞれば、いっぱい星があるように感じるよ」などと話しながら、楽器を選び直して、再び音探しに向かう。

栃木県では、「学びに向かう集団づくり」と「子どもが意欲的に取り組む授業づくり」を一体的に行う「学業指導」の充実を推進しています。（「学業指導の充実に向けて」栃木県教育委員会　平成24年３月）

チェックシートもあります。日頃の取組を振り返ってみましょう。

学業指導の充実に向けた取組を振り返ってみましょう

このチェックシートには、本県の全ての教職員に、自分の学年や学級で必ず取り組んでほしい内容を項目として示しました。

学びに向かう集団づくり

1　帰属意識の高い学級づくり
- □子どもたちが協力して取り組めるように活動を工夫している。
- □一人一人が、個性や能力に応じた役割を担えるように工夫している。
- □行事等に企画段階から子どもたちがかかわれるように工夫している。
- □他の学級、学年など、いろいろな集団との交流の場を設定している。
- □子どもたちと感動を共有できるように心がけている。

2　規範意識の高い学級づくり
- □学年、学級で守るべきルールを具体的に定めている。
- □教職員間の共通理解のもと、ぶれない指導を実践している。
- □子どもたち自身に学級の約束を決めさせている。
- □時と場に応じた行動がとれるように指導を工夫している。
- □日々の生活や行動を謙虚に振り返る時間や場を設けている。

3　互いに高め合える学級づくり
- □学級の目標を子どもたちと一緒につくっている。
- □将来どんな生き方をしたいかを互いに話し合う機会を設けている。
- □競い合う場面や助け合う場面を意図的に設定している。
- □当番活動や係活動を活用した学級経営をしている。

子どもが意欲的に取り組む授業づくり

1　自信をもたせる授業
- □一人一人が活躍できる場を意図的に設けている。
- □子どものよいところを認めたり、ほめたり、励ましたりしている。
- □一人一人の実態に応じ、指導計画を明確にしている。
- □児童生徒が自ら選択できるように、多様な学習方法を用意している。

2　コミュニケーション能力をはぐくむ授業
- □友人の発表をしっかり聞けるように指導を工夫している。
- □自分の考えをまとめ、発表できるように指導を工夫している。
- □考える、互いに教え合う、指導する場面をバランスよく設定している。
- □小集団活動を取り入れ、子ども同士のコミュニケーションを促している。
- □自己評価、他者評価を生かした授業を実践している。

3　一人一人の実態に配慮した授業
- □日記、作文などをとおして、自分の心を表現する指導を行っている。
- □実態調査、教育相談などをとおして、学習不適応の把握に努めている。
- □学習不適応の解決に、教職員が協力して組織的に取り組んでいる。

※子どもの発達に応じて、新たな項目を加える等、活用してください。

栃木県教育委員会　学業指導　検索

平成 26 年度幼児教育調査研究委員会

【　委　員　】

平　野　千恵子	芳賀町立祖母井保育園
徳　原　真奈美	つるた保育園
佐　藤　明　子	認定うつのみやこども園
山　口　雅　美	太陽幼稚園
石　塚　公　美	上三川町立上三川小学校
古　島　由美子	日光市立南原小学校
吉　永　有　朋	益子町立益子小学校
上　井　明　子	足利市立東山小学校

【　事務局　】

栃木県教育委員会事務局学校教育課
栃木県教育委員会事務局学校教育課児童生徒指導推進室
栃木県総合教育センター幼児教育部

（所属等は平成 27 年 3 月現在のものです。）

※リーフレットは、栃木県幼児教育センターのホームページよりダウンロードできます。

H27. 03